

目的 長年の桜島の火山活動により、降灰下で生活する住民は生活全般にわたり、その被害に悩まされている。特に、衣生活においては、降灰の衣服への付着により、審美性が損なわれる、衣服の購入、および管理のための負担が過剰になる等、直接、間接的にその影響は大きい。そこで、本研究では、衣生活の側面から、日常生活の実態、降灰の克服への意識と取り組みを明らかにし、さらに、降灰による衣服素材への影響を調べるための基礎資料を得ることを目的とした。

方法 調査は、対象として、桜島の行政区域別に危険率5%以内で、全島27地点から比例配分によって1250世帯を抽出し、1989年2月～3月に質問紙による留置調査を行った。衣生活に関する質問は購入、着用、洗濯、および廃棄の4項目について行い、その調査結果を、主として、行政区域、降灰量の多少による区分地域、主婦の年代層と居住年数の分析軸によって検討した。

結果 調査用紙の回収率は87.5%（1094世帯）で有効回収率は85.6%であった。衣服を選択する場合、購入時に33%、外出時に59%が降灰を意識し、年齢層が低いほど、居住年数が長いほどその割合が大きく、降灰日に着用する衣服として72%が「洗濯が簡単なもの」をあげていた。降灰量の多い地域ほど、洗濯物の脱変色の経験が多く、また降灰が付着した衣服を「すぐにクリーニングに出す」割合が高い。衣服を廃棄する理由として、「サイズの変化」、「流行遅れ」、次いで「色あせ」、「好みの変化」、「黒ずみ」、「すりきれ」があげられていた。